

## 江戸のオランダ人

令和元年9月22日（日）10:00～11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### 1. はじめに

別子銅山東京展会場でパネルの説明をしていた時、住友の社員から片桐一男の「江戸のオランダ人」（中公新書）の中に、棹銅はバラストの役割もしていたとの記述があることを教えられた。宿舎への帰り道に神田の古書店街で、その本を探すが新刊本ではなかった。古書店を閉店時間と競争しながら探し回ると、ついにその1冊を見つけた。これまでは別子の御用銅の買い手としてのオランダ人しか知らなかった。

7月2日に東京へ講演に行ったときに、「オランダ東インド会社」（講談社学術文庫）を新刊本で探したがなかった。またまた時間と競争して神田の古書店街で、何とかその1冊を見つけた。本との出会いはいつもドラマで彩られている。

鎖国していた江戸時代は、長崎の出島が世界への窓口となっていた。その窓口からオランダ人を通じて世界の情勢を学んだ。スペイン・ポルトガルの繁栄とイギリス・フランスの台頭との間を繋ぐ最盛期のオランダと世界史の中で出会った日本であった。その時期に、先進地ヨーロッパを学んだのはその後の歴史から見ても大きかった。出島のオランダ人はどんな社会的機能を果たしたのか。これまでの講座では、1冊の本の内容を解説したが、今回はテーマに即して次の6冊の本を突き合わせての解説を試みる。

片桐一男	「江戸のオランダ人」	（中公新書）
松方冬子	「オランダ風説書」	（中公新書）
桜田美津夫	「物語オランダの歴史」	（中公新書）
山脇悌二郎	「長崎のオランダ商館」	（中公新書）
羽田 正	「東インド会社とアジアの海」	（講談社学術文庫）
永積 昭	「オランダ東インド会社」	（講談社学術文庫）

### 2. オランダという国名

オランダという呼称は、ポルトガル人がネザーランドの中の経済的・軍事的にもっとも有力なホラント州をオランダと発音したのが、日本語での国名となる。オランダ語のHollandはポルトガル語ではHollandiaと綴り、頭文字のHを発音しないのでオランダという音になる。

### 3. オランダの歴史

紀元前58年に、カエサルが率いるローマ帝国の侵攻をうけ、帝国の最北端の地域に

編入された。

紀元1世紀頃ゲルマン部族のバターフ（ラテン語でバタウィ）人が果敢にローマ人に抵抗して独立を勝ち取っていた。（17世になると、バターフ人の神話がオランダ建国の有力な論拠となる。）

4世紀以降の民族移動時代はゲルマン人の通過経路となった。

7世紀から8世紀にかけて、ネーデルランド北部からドイツ北部の海岸域にはフリースラント王国があったが、734年のホールン戦いでフランク王国に敗れ、その後785年にフランク王国の領土となった。

800年頃から1000年頃にかけてはヴァイキングの激しい侵攻を受ける。

10世紀から11世紀にかけては神聖ローマ帝国が支配した。北部の湿地帯は排水して農耕地に変わっていき食料の増産が可能となった。それに伴い商業が発達して都市権を確保し、自治権を持つ発展した街は、まるで独立国のようになっていた。

15世紀になるとブルゴーニュ公国の一部となる。このころから毛織物生産により経済的先進地となり、裕福な都市を生み出していった。

1477年にシャルル公が戦死してブルゴーニュ公家は途絶え、一人娘のマリーがオーストリア大公と結婚して、ハプスブルグ家の所領となった。

やがてハプスブルグ家の分裂でスペイン領になるが、1548年勃発の八十年戦争中に世界の海上権を握り1581年に独立を宣言する。三十年戦争後の1648年のウェストファリア条約で独立が正式に認められた。共和政をとったオランダは、1602年に東インド会社を設立し、ジャワ、スマトラ、モルッカを植民地とし、香料貿易を盛んに行き、その拠点をバダヴィアに置いた。さらに台湾南部のゼーランディン城、北米のニューアムステルダムを、1621年に西インド会社を設立し、南アフリカのケープ、セイロン島のコロンボなどを拠点に海外に勢力を拡大した。1623年にアンボyna事件を契機にイギリスを東南アジア、東アジアから撤退させる。これらによってリスボンに代わってアムステルダムが西ヨーロッパ最大の商業、金融都市となる。

1609年に平戸に商館を置き、1639年のポルドガル船来航禁止以降は、ヨーロッパで唯一の対日貿易を長崎出島で独占した。

1789年にフランス革命が起こると1793年にフランス革命軍が占領し、バダヴィア共和国を樹立するが、ナポレオンが皇帝に即位すると1806年にホラント王国に移行した。やがて1810年にナポレオンはフランスの直轄領とした。この混乱で東インド会社は解散する。

1813年にナポレオン帝国が崩壊するとネーデルランド王国が樹立された。現在まで続くオランダ王国の始まりである。第一次大戦では中立国を宣言した。しかし、第二次世界大戦ではナチス・ドイツに占領された。

1830年にはベルギーが分離独立した。

1948年にユリアナ女王が即位し、1980年にベアトリクス女王が即位した。

#### 4. 貿易相手国に残ったオランダ

朱印船貿易を東南アジアでしていた日本人も、鎖国政策で渡航が禁じられた。貿易は外国人の手に委ねられた。そのキーワードは、禁教、貿易、情報の3つである。

##### 禁教

カトリック文化圏では、国王の布教保護権と表裏一帯の関係で布教活動をするので、根本的に内部矛盾を持っていた。ポルトガルによる布教は、日本がポルトガル領にならない限り日本人の宗教改革は完成しないのである。信徒の数が増えてカトリックの司教座を置く必要になると、布教保護権の考え方からは、司教を選んでローマ教皇に推薦するのはポルトガル国王である。司教座教会のための土地を用意し、教会を建設するのもポルトガル国王である。現地の人々の意志や要求が入り込む余地はないのである。

免罪符の交付や教会への寄付で見られるカトリックの墮落に抗して、宗教改革の火の手が北ヨーロッパで上がる。併せて近代初期ヨーロッパ各国で繰り返された王権と身分制議会との主導権では、多くの国では王権側が勝利した。しかし、オランダでは、ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝カール5世で、スペイン王のカルロス1世と闘い、議会の方が王権を排して議会主権国家の共和国となった。僧職階制を否定するカルヴィンが勝ちを収めたため、カトリックが無くなっていった。

##### 貿易

1602年に世界最初の株式会社として東インド会社を設立してアジアに進出し、ポルトガルから香料貿易を奪取し、世界の海の覇権を称えた。この貿易の富はアムステルダムに流入してオランダ海上帝国の黄金期を迎える。ヨーロッパ人は香料を医薬品として見ていたのであった。

1621年に西インド会社を設立して、新大陸でのポルトガル、スペインの貿易に戦闘的に参入する。しかし、長続きはしなかった。奴隷貿易に手を染めることとなる。

政権を樹立した徳川幕府は、海外との貿易関する人とモノの動き全体を、可能な限り把握して管理しようとした。日本との貿易を許された平戸に商館を持つオランダ人は、この時に会社全体の7割以上の利益を平戸商館で上げていた。商館の正面破風に1639という西暦年号が入っているだけの理由で、新築の平戸商館は取り壊すように命令され、これに従った。アジアの他地域ではしばしば高圧的で不遜な態度とは大違いの低姿勢は、貿易により利益を得るためであった。長崎の出島に移り住むことにも従った。出島は長崎市中にいたポルトガル人を隔離するために埋め立て造成された扇形の小島で、1636年に完成した。長崎を拠点とする朱印船貿易に携わっていた、長崎、博多、京都、大阪、堺などの豪商25人が請け負った。オランダ人は1641年以後、天領の出島に住むようになった。オランダ人はあくまで店子であった。住む建物は家主である商人が用意した。家賃は年銀55貫目、現在のお金にして1億円近い金額である。出島の前には貿易を管理する長崎奉行が配置された。

しかし、海外との貿易を中国とオランダに限定されたために、取引はオランダのペー

スとなり膨大な利益を上げることとなった。逆に日本は膨大な損益をこうむることとなった。

## 情報

日本人の海外渡航を禁じた徳川幕府にとって、オランダ風説書は最新の世界情勢を知る唯一の情報源であった。幕府はキリスト教禁止の徹底のために、後には迫りくる西洋近代化に立ち向かうために情報を求めた。オランダ人は貿易上の競争相手を蹴落とすために応じた。激動の世界の中で、双方の思惑が交錯し、商館長と通詞が苦闘を繰り返す。鎖国の200年間、オランダ風説書は毎年綴られたのであった。簡略ではあるが、変わりゆく世界が読み取ることが出来る。それはまた、「彼らは何でも信じる」と言わしめた打算と友情の記録でもある。

### 5. オランダを中心とした対外動向

1543年 ポルトガル人、種子島に漂着。鉄砲伝来。

1549年 フランシスコ・ザビエル、鹿児島に上陸。

1550年 ポルトガル人、初めて平戸を訪ねる。

1568年 オランダ人、ディルク・ヘリッツソーン・ポンプ、船員で来日する。

1570年 ポルトガル人との貿易のために長崎が開かれる。

1580年 大村純忠、長崎をイエズス会に寄進。

1585年 オランダ人、ディルク・ヘリッツソーン・ポンプ、再来日。

1587年 豊臣秀吉、長崎を直轄地にして宣教師の追放を命じる。

1600年 オランダのリーフデ号が、豊後佐志生（現在の佐伯市）に漂着。

（リーフデ号の模造造船はハウステンボスで見られる）

航海士でイギリス人・アダムス（三浦按針）が家康の外交顧問になる。

航海士のオランダ人のヤン・ヨーステン・ファン・ローテンステインも家康に仕える。

（東京駅八重洲口の地名由来者）

1602年 オランダ東インド会社設立。

1609年 オランダ東インド会社船、初めて平戸に到着、商館を設置。

1619年 オランダ東インド会社、バダヴィアを占領、都市建設。

1635年 徳川幕府、朱印船制度を廃止。日本人の海外渡航・帰国を禁止。

1638年 島原の乱で徳川幕府の依頼でオランダ艦船が砲撃する。

1639年 オランダ商館長のカロロンが大砲を江戸幕府に献上する。

1639年 徳川幕府、ポルトガル人の来航禁止。混血児とその母をバダヴィアに追放。

1641年 徳川幕府、オランダ東インド商館の平戸から長崎出島への移転命令。

1689年 長崎で唐人屋敷建設。

1697年 徳川幕府、長崎会所を通じて貿易を管理する。

1715年 徳川幕府、正徳新例により長崎貿易額を制限。

1774年 オランダ語版の解剖学書を解体新書として翻訳される。

1799年 オランダ東インド会社廃止。

1828年 シーボルト事件。

## 6. 出島での商品

長崎出島貿易では、生糸を中心にインド産の持綿製品や羅紗など、ヨーロッパ原産の毛織物類が輸入された。江戸中期以降は砂糖が主な輸入品となり、その他、ビードロやギヤマンと呼ばれたガラス製品、ヨーロッパで焼かれた陶器、薬種、染料として使用する蘇木、鮫皮、錫、鉛などが入って来た。鉛は銀吹や南蛮吹の製錬の必需品である。

日本からの輸出品としては、江戸初期の主要品は銀であったが、海外へ多量の銀流出を徳川幕府が問題視し、その後は金を輸出する。17世紀後半からは銅の輸出に切り替えて、以後幕末まで銅が輸出の主力となる。輸出用の銅は御用銅と呼ばれ、別子、南部、秋田の銅山に限定して三大御用銅山と称した。銅のほかに樟脳、陶磁器、漆製品、醤油や酒の樽物を輸出した。

輸出の主力となった日本銅は、バタビアから東南亜アジアだけでなく、インド、ペルシア、アラビアまで行っていた。本国のアムステルダムには、元和9年(1623)に初渡した。アムステルダムの銅市場に日本銅が出回り始めたので、銅輸出国のスウェーデンは、値下がりをおそれて計画的輸出に切り換えた。アダムスミスは、「国富論」の中で「日本の銅の価格は、ヨーロッパの銅山の銅価の価格に対して、必ず何等かの影響をもっている。」と述べる。

日本はオランダのもたらす商品に見合う輸出商品を持たなかったため、豊富な産出量に任せて、最初は銀、次いで金、最後は銅の正貨や地金を次々と食いつぶしていった。逆にオランダは日本に対して金、銀、銅の貨幣で支払うことはなかった。日蘭貿易は全くの片貿易であった。ポトシ銀山に迫るほどの産額を誇った石見銀山、18世紀に世界最大の産出をみた別子銅山をはじめとする御用銅山の乱掘の結果、現在のような鉱物資源の乏しい国にしてしまった。おびただしい金属の流出がオランダを潤した。

### 1649年のオランダ東インド会社の純益

日本	709,603	グルデン	(39.0%)
台湾	467,534	グルデン	(25.7%)
ペルシア	326,842	グルデン	(18.0%)
スマサット	92,592	グルデン	(5.0%)
マラバール	42,964	グルデン	(2.3%)
ウィングルラ	25,780	グルデン	(1.4%)
スマトラ西岸	93,280	グルデン	(5.1%)
ジャンビ	20,526	グルデン	(1.1%)
マチェー	2,953	グルデン	(0.1%)
マカッセル	43,523	グルデン	(2.3%)

## 7. ケンベル商館長の江戸参府

### コース

- ①長崎から西海道を陸路で九州を横切り、小倉に至る。5日を要する。2里の関門海峡を船で渡り下関に上がる。
- ②下関から海路で瀬戸内海を大阪に行く。1週間に要する。または、大阪から海路13里手前の兵庫沖で小舟に乗り換えて大阪に行く。
- ③大阪から江戸まで東海道を陸路で行く。2週間に要する。

### 時期

初めは前年の暮れに長崎を出発して、翌年の正月に江戸に到着していた。寛文元(1661)年からは、正月に長崎を出発するようになる。陰暦の1月15日か16日。3月朔日か15日に将軍に拝礼する。長崎帰着は5月か6月。

## 8. 商館長の銅吹き所見学

日本銅は、出島貿易の決済品の主要品であったと同時に、オランダ船にとっては船の安全を確保するための底荷(バラスト)としても重要な品物であった。従って、歴代商館長は江戸参府の帰路、大阪住友の銅吹き所を見学するのも慣例になっていた。商館長一行と住友の間立って、阿蘭陀宿の主人である銅座が、連絡・案内の労を取っていた。

- ①見廻り オランダ商館一行が帰路に、大阪に着くと泉屋が阿蘭陀定宿長崎屋の銅座為川へ見廻を派遣して、銅吹き所見学の予定を問う。
- ①通知 町奉行所から泉屋に文書で、日時と用意が通知される。銅座為川からも通知される。
- ②届け 泉屋から町奉行所、銅座為川にオランダ人見学で見物人の混雑の届け。棹銅吹き方が危険なので、人形で説明する届け。
- ③指示 銅座御役所から、危険に対してオランダにも注意させるが、その心得で実施の指示。
- ④準備 見学、宴応の準備をする。
- ⑤見学 見学の案内。
- ⑥宴応 座敷に招いての酒肴のもてなし。

## 9. オランダ<sup>ふうせつがき</sup>風説書

オランダ船の船長やその他の乗客が上陸してから2~3時間後、ヨーロッパおよび東インドの情報を聞くために、出島の乙名、出島町人、目付らに伴われて通詞仲間が商館長のもとへやって来る。この時、戦争や講和、戦闘や勝利、王の即位や死亡など一般的な情報が提供される。通詞らがそれを書き留める。その情報は清書され、商館長の署名が入れられて、臨時の飛脚を建てて江戸に送られる。これがオランダ風説書である。

最初はポルトガル語を仲介として造られたが、やがてオランダ語から直接日本語に訳さ

れた。しかし、オランダ人は出島の中だけでは日本を十分理解することが出来なかったし、通詞たちもオランダ側から学ぶ情報にも限界があった。また、長崎町人と言う身分上の制約から、徳川幕府中枢の考えていることはわからなかった。そして、お互いに伝えない方がよいと判断したこともあり、意図的に内容を変えたことも多かった。伝えようとしても伝えられなかったというべきかもしれない。世界の情報を200年にわたって記録したものは世界でも風説書く以外には見当たらない。それにして200年続いたというのは驚異である。

風説書は、江戸時代に日本人が聞いたオランダ人のささやきでしかなかったが、商敵のポルトガル人、スペイン人、フランス人、イギリス人、中国人などを日本に近づけさせないための悪口のささやきであった。わずかな情報の中に、ヨーロッパの近代化を読み取っていた。歴史の流れで見ると、蘭学は明治の近代化の助走路になっていた。江戸時代の日本人は、完全に孤立していたわけではなく、世界史の文脈の中確実に位置づいていた。

歴史の流れで見ると、明治の近代化の予備知識に位置づけられる。ヨーロッパ言語はラテン語を母語として派生した言語である。英語、フランス語、ドイツ語、オランダ語の母語はラテン語である。元来オランダ語は、16～17世紀に近代科学の叙述を可能にするために、平易な日常語を繋ぎ合わせて次々に造語をつくっていった言語である。

日本が本格的に取り組んだ外国語が、造語を作りやすい特という特徴をもつオランダ語だったので、明治になって西洋文明が本格的に流入する前に、科学技術に関する基本的言語をオランダ語経由で日本語に訳していたことは、日本近代化の有利な前提となっていた。

## 10. アヘン戦争の情報

アヘン戦争が始まったのは天保11年(1840)で、終わったのは天保11年(1840)である。戦争の第一報は、戦争が始まったその年に届いた。アヘン戦争の風説が入ってからにわかに新兵器への注文が再燃する。天保15年(1844)には、幕府の老中がアヘン戦争の直後に著わされた魏源の「聖武記」を購求している。魏源は、イギリス軍と戦った人で、此の署は、清朝の敗北に感憤し、同時に西洋文明の実力を認識して、為政者の軍政を批判しつつ、軍事力再建策と財政振興策を説いた。

## 11. 銀の吹き直し

17世紀前半の日本は銀産国であった。ポルトガル船、オランダ船、シナ船で輸出した。寛文8年(1668)に幕府は銀の輸出を禁止したので、出島でのオランダ船の銀輸出は寛文7年(1667)で終了する。

輸出された丁銀は、シャムやトンキンでは純銀での支払いが求められたので、オランダ東インド会社は直接には使えなかった。丁銀の純度は80%であったので、500匁の銀包みの丁銀は400匁に吹き直しをした。銅から銀を抜く「南蛮吹き」のルーツはここに在るのではないかと考える。

## 12. おわりに

鎖国を始めた江戸時代に、世界の窓口となった長崎出島の住人はオランダ人になって、風説書で世界の情報を得ていた。アヘン戦争もリアルタイムで知っていた。そして貿易相手として世界の物品を輸入していた。

オランダ東インド会社は、植民地の先兵であり残忍な征服者としてアジアに足跡を残した悪辣な商人であった。しかし、日本ではヨーロッパの進んだ文化をもたらした親切な商人であった。貿易によって利益を上げるという目的を達成するためには、地域によって様々な手段を採用した多面的な顔の一つを表していた。

17世から18世紀の世界は、地域ごとに特産品を持っていた。唯一、北西ヨーロッパは、他地域の人々が欲しがるような特産品をほとんど持っていなかった。北西ヨーロッパは緯度が高く冷涼な気候の下では、手間とお金をかけても、限られた量の農作物しか収穫できなかった。それ故に農作物の価格は高く、生活にお金がかかった。結果として職人の工賃が高くなって製品も高かった。これに対して、温暖なアジアでは、豊富に産する農作物の価格は安かった。生活にさほどのお金もいらなかったので、工賃も安かった。インドの綿織物が北西ヨーロッパで売れたのは、高品質なのに価格が安かったからである。

北西ヨーロッパがアジアの物産と交換した「自分たちの商品」は、南北アメリカが産する銀であった。ポルトガルとオランダは、一時石見銀山の銀を使う。アメリカの銀とアジアの物産が「近代ヨーロッパ」の経済基盤を生み出したのである。

出島から輸出された銅は、アジア地域の経済圏でオランダを富ましたのである。日本はジャパング・黄金島であった。そして、オランダ人は宗教を封印した親切な商人であった。しかし、一歩間違っていたらインドネシアになっていたかもしれない戦慄が走る。